ウンターにお持ちください

2011年01月06日 11：41：34

入館証番号：

Call Slip

23

＜請求票＞（控）

書名
資料名： 支那民謡とその国民性
巻次 ：
著者名： 七理重恵 // 著
出版者： 明治書院
出版年： 1938
大きさ： 19cm
頁数 ： 352p

所蔵館 ： 中央
所蔵部署 ： **1階資料お渡し・返却カウンター**
配置場所 ： 1/66A 中)B1書庫A
資料ＩＤ ： 1127115423

請求記号
9210
6

目序 1～3
目次 1～8
本文 2～48

東京都立日比谷図書館
昭21.8.20
1702

自序

予は、世界戰爭の終り頃から、支那學に興味を持つやうになり、その文學を胎生した其の民俗其土地に接して見たいと思つて居た。大正十年の夏、初旅を支那大陸に味つてから、これらの文化やこれらの藝術が全くその黄土より芽を出して伸びたことに氣が附いた。所が、儒教の教典と現地民生の現狀とを比較するに及び、絶大の矛盾を感じ、その中でも、詩經を反復誦讀するに至つて、漢唐列儒の詩經に對する態度に頗る飽きたらなさを覺えた。而して、詩經の重要部分が、卽ちその民謠たることを感知し、詩の正統が民謠に結びついてゐることを確信し、その本質的なものを捕捉せうと思つて、度々大陸に、民謠蒐集に出かけた。今、筐底に藏するもの二萬を超え、折角整理翻譯の途上にあるから、今、ここに、絶對的結論を提げて極

言することは、慎むべきであるが、支那民謠がその民俗性や社會性や國民性と相關することの甚だ深いことは信じて疑ひない。殊に、民俗を知ると共に、政治的民謠の多いのには一驚を喫した。或は、これがこの民族の一特質をなすのではないかとさへ感ぜられた。今、手元にある譯歌約三百篇を原歌と共に對記し、「民謠と國民性」てふ小論文を附して世に公にした。原歌はなるべく、種々の角度から、異なれる題材を網羅するに努め、各省各地より選擇し、その民謠の鳥瞰圖たらんことを期した。しかし、丹念に集むるなら數十萬に登るで有らう厖大な民謠を、この小冊子にうまく押し詰めることは無理で有るが、多少の資料を世に送り得たことと自ら慰めてゐる。且つ、書肆の希望もあり、多岐に渉ることを避け、その外廓を示すに留めた。他日研究の大成を見たなら、更に世の叱正を得たいと思つてゐる。敢て同好の各位に告げる。

なほ本書を公にするに際し、上海に居住の畫伯王廷玨氏の裝幀を得たるは感謝にたへず。且つ、鐘敬文氏の長篇の序文を得乍ら、竟に紙面の都合上、止むなく割愛せるは拜謝の辭無し。深くお詫びする。

昭和十三年明治節の佳き日

池袋雙柿庵にて

七　理　重　惠　誌す

位は邦譯して、支邦民謠全集を公にせんとす。

一、なほ詩の生命を蒸溜檢出して、詩經の源流を究めんとす。この小著は、それに達する道程の一興のみ。

一、なほ、日本民謠の漢譯と共に、支那を題材とせる「都々逸」を附錄したるは、蛇足乍ら、研究上の道草のみ。

一、本書裝幀の畫は、上海の名家王廷珏氏が江蘇省の民謠「小さな天秤棒」（參一六九頁照）に因つて特に揮毫せられしものなり。

目次

第一篇　民謠より見たる支那國民性

民謠とは何か……一
民謠は民族の聲である……三
民謠を聽いてその民を知る……四
民謠の種類と內容……六
民謠に現れた政治の是非……八
民謠に現れた家庭生活……一七
民謠に現れた戀愛生活……二四
民謠に現れた年中行事……三一
民謠に現れた教訓……三七
民謠に現れた迷信其他……四二

第二篇　對譯　支那民謠選

河北省……五〇

貴世凱 五〇　一番目は 五一　赤い日 五三　とんぼ 五五　雲 五四　いもうとは驢馬に 五五
三毛が啼く 五六　二階で三人酒をのむ 五七　嫁とり 五八　あばた盡し 五九　一人の娘
恥づかしがらぬ 六〇　花嫁 六一　ゑんどうの花 六三　老猫〳〵 六四　一の奥さま二の
奥様 六六　天の神さま 六七　蚊 六八　年老いた主婦さん 六九　非人粥 七〇　青い菜 七一
ひよこ 七三　小娘 七五　師走の七八日 七四　発さん 七五　そらまめ 七六　長い頸 七七
老人 七八　お豆を喰べると 七九　容姿は二の町 八〇　米屋さん 八一　金の姐さん 八三
人は急いで市に行く 八三　大柿 八四　盲や盲 八五　黒い齒は貧乏 八六　小さな嫁女 八七
山上の雞の巣 八八　あはれな女 八九　始皇帝 九〇　一人の子供 九一　水酌みの若い衆
九三　三月三日 九三　都はづれ 九四　王さんの嬢さん 九五　この人せつかち 九七　な
つめの木 九八　坊やは泣くな 九九　花が咲いて 一〇〇　七つの娘尼になる 一〇一　胡椒
樹 一〇三　姐さん丁度十七 一〇四　お寺の門 一〇五　お嫁を貰はう 一〇六　花よめ花かど
一〇七　小さい脚の女 一〇八　太鼓がどん〳〵 一〇九　小ちやなちんころ 一一〇　書生に

嫁るな 一一一　山を上るらば 一一三　〇〇もどつたら 一一三　九ツてつたら九 一一四　閑
だから街を出た 一一五　蟲とぶ 一一七　大きなみ足 一一八　太鼓は太鼓にもたれる 一一九
嫁に行こ 一一〇　松の枝檜の枝 一一一　おう母さま 一一一　高い〳〵山の上 一一三　おれ
の伴 一一四　太ツ腹の男 一一五　大きな柿 一一六　師走の八日 一一七　雀 一一八　お正月
が來る 一一九　蟬が啼く 一一〇　ちびの嫁 一一一　羊 一一三　くちなしの花 一一三

山西省……一一四

お正月が來た 一一四　一心に思ふ 一一五　垣根隔てて 一一六　山の向ふに 一一七　あなた
は竿を 一一八

山東省……一一九

秋ぞら 一一九　ほろ車 一一〇　喰べよう 一一一　お母さんに見せるな 一一三　こんどの
お母憎らしい 一一四　お老婦さん打つて 一一五

江蘇省……一一六

木喰蟲 一一六　正月の十五日 一一七　お正月十五日 一一八　盲 一一九　とつとつとつ
一一〇　水あげ 一一一　鵲が啼く 一一二　和尚さんと蛙 一一三　山歌 一一四　新しい嫂さ

ん 一五五　一匹の猫 一五六　お日さま赤い 一五七　小さな婿さん 一五八　後妻の諺 一五九
懶け合ひ 一六〇　小さな禿さん 一六一　蛙 一六二　黒犬黄犬 一六三　龜と鬼 一六四　花鞋
こさへて 一六五　小さな脚 一六六　こほろぎ 一六七　年寄り 一六八　小さな天秤棒 一六九
蔣介石 一七〇　農夫の嫁女 一七一　あばたは死ぬる 一七二

浙江省……一七三

からす 一七三　にらの花 一七四　雞冠花 一七五　まくわ瓜 一七六　鳩ぽつぽ〳〵 一七七
かへる 一七八　一羽の鳥 一七九　船漕いで 一八〇　七人の姉妹 一八一　花鼓打つて 一八二
氣が採める 一八三　役人の金儲け 一八四　小さな弟 一八五　破れ布で破れ褲 一八六　たこ
一八七　頭 一八八　ちび媳 一八九　黄いろの犬 一九〇　せみ 一九一　ざくろ 一九二　ほたる
一九三　早起き 一九四　大手ふり〳〵 一九五　油賣り 一九六　ならんでお坐り 一九七　起上
り小法師 一九八　横着者 一九九

河南省……二〇〇

ほうれん草 二〇〇　ちん〳〵釘打ち 二〇一　いなごの葬式 二〇二　張物 二〇三　野良仕事
二〇四　鵲が啼く 二〇五　白蓮教(一) 二〇六　同(二) 二〇七　蜜蜂 二〇八　虹 二〇九　佳い婿

ほしや 二一〇　八つの兒 二一一　さか〳〵小唄 二一二　女の子 二一三　天の河 二一四　道
に沿うて 二一五　靜女 二一六　陳太鼓うつて 二一八　兒さん獵りに 二一九　虹 二二〇

四川省……二二四

草は青い 二二四　金の花銀の花 二二五　青菜臺 二二六　いんこ 二二七　男の願ひ 二二八
女の願ひ 二二九　星の宿 二三〇

陝西省……二三一

こほろぎ 二三一　虹 二三二　人形芝居 二三三　かりうど 二三四　猫のお掃除 二三五　すず
め 二三六　さくらんぼ 二三七　青い石 二三八　灰山 二三九

安徽省……二四〇

蟬が啼く 二四〇　三要 二四一　筍の皮 二四二　西瓜 二四三　雇はれて難儀 二四四　雇つて
難儀 二四五　嫁さん迎へて 二四六

江西省……二四七

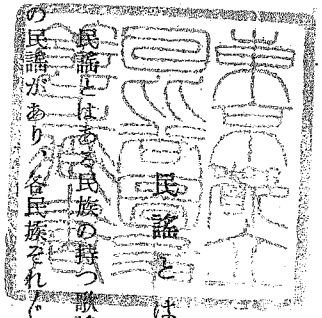
つばめ〳〵 二四七　ずるい雀 二四八　水仙 二四九　軒の燈籠 二五〇　横着な女房 二五一

雲南省……二五二
大雪 二五三　夫婦げんか 二五三　朝疾う起きて 二五四　門神 二五五　天道さまを拜む 二五六
小ちやな椅子 二五七
貴州省……二五八
醉つぱらひ 二五八　つぶ〳〵穴々 二五九　磨ひき 二六〇　女中 二六一　御門にお辭儀 二六二
湖南省……二六三
嫁ぎゆく娘 二六三　かささぎが啼く 二六四　すずしろ 二六五　絲ひき 二六六　一軒屋 二六七
ほととぎす 二六八　お姐さん 二六九　豆 二七〇　船漕いで 二七一　刈田の歌 二七二　早寢
おそ起 二七三　正月元日 二七四
湖北省……二七五
からすや雀の歌 二七五　圓いものはなあに 二七七　天上の星 二七八　かささぎ 二七九　車
踏み 二八〇　一つの銀貨 二八一　ちびさん 二八二　三歲の子供 二八三　年が良ければ 二八四
お嫁入り 二八五

廣東省……二八七
一つで泣いて 二八七　鳩 二八八　嫁女可愛や 二八九　桃の花は眞赤 二九〇　休まう〳〵 二九一
にはとり 二九二　無いこと盡し 二九三　風の婆さん 二九四　十月朝 二九五　月夜 二九六
廣東省附(蛋歌)……二九七
人の事など 二九七　松は斬つたら 二九八　男に生れても 二九九　朝早う起きて 三〇〇　脚
も手もだるい 三〇一　一臺のベッド 三〇二　大船が出かけりや 三〇三
廣西省……三〇四
緋鯉 三〇四　雲 三〇五　辛い妹 三〇六　燕が來たら 三〇七　農夫の妻 三〇八　唱(男の歌
へる) 三〇九　答(女の答へる) 三一〇
福建省……三一一
お月さまおえらい 三一一　龍船くらべ 三一二　あの妹 三一三　岩の崖壁 三一四　一度おど
かすと 三一五
奉天省……三一六

二人の娘さん 三六、張ねえさん 三七　娘よ哭くな 三八　狼が來た 三九　猫の尻尾 三〇　年逆り 三一　泥いぢり 三三　小山 三三　怖い叔さん 三四
黑龍江省……三二五
蝶々 三五　でつかい頭 三六　大猫 三七　老いた鳥 三八　がん〳〵 三九　紅い高粱 三〇　ひなたぼつこ 三一　出征の歌 三三　七不思議八化け 三三　虱と蚤の不景氣問答 三四　ひよこ 三五
吉林省……三三六
行燈をともさぬ 三六
附錄
日本民謠（漢譯）……三三七
日本民謠（支那に取材せる）……三四四

第一篇　民謠より見たる支那國民性



民謠とは何か

民謠とはある民族の持つ歌謠である。日本民族には日本民族の民謠があり、漢民族には漢民族の民謠があり、各民族それ〴〵特色ある民謠を持つて居る。

支那は土地が廣漠として、そこに住む民族も單純ではない。漢民族の外に、苗族、回族、蒙古、蛋、狼獞等いろ〳〵居るが、その大部分は漢民族である。且つ、同じ民族でもその地域に因つて、各異なる民謠を持つて居る。

民謠はその民族の聲である。民謠を見渡すとその民族の聲がよく分る。その氣品も趣味も、風俗も好尚も性生活もはつきり攫める。その素樸な純眞な僞りのない飾り氣の少い歌詞とその民族固有の音律語調を基礎とする單純なるメロディーとに、その民族の赤裸々な感情が溢るる許りにうづ高く盛られて居る。

「移風易俗」

と言ふ語の半面にも、この民謠と民俗との深い關係を爲政者が示唆してゐることを知る。

民謠は、時々刻々變化する。歌ふ人に因つて少しづつ、修正せられ乍ら、長い年代には隨分と變つて行き、その民族の感情にしつくり合つた玉篇にまで磨き盡されて止む。この期間に於ける歌手——大衆の誰れかれは同時にこの歌の作者であり修正者である役目を擔つてゐる。

民謠は民族の聲である

民謠はその民族の僞らざる聲である。何らの修飾も虛僞も無い民意の表現である。何らの作爲も技巧も無い性情の自然的發露である。換言すればその民族その民衆全體のもので、一個人の私有物ではない。だからその作者は當然その民族民衆に歸する。卽ち民謠には原則として作者が無い。否な假りに作者が有つてもそれが固定した一人では有り得ない。否たとひ固定して居ても、それは民衆一般の關知しない所。ただそれが民衆の情意の呼吸と一致して居れば良いのである。もし、この呼吸とぴつたり合つてゐなければ、どんなにえらい人の創作した歌謠でも歌はれない。世上能く見る近代の、爲めに作られた宣傳用の音頭や小唄に何か知ら物足らなさがあるのを見落としてはならぬ。要するに、かれらは、歌ひたくて〳〵たまらないから自づと歌ふので有るか

ら、如實に、生活の一角を占めて居るのである。卽ち民衆と共に生きてゐるのであつて、歌はせられて居るのでは無く、止めることが出來ず止むなく歌つてゐるのだ。この感情は、口から耳へ、耳から口へと生きたまま、歌ひ傳へられてゐるので、書籍やノートから甦つたものではない。ピチピチと生きてゐる生命のある歌である。現實の心の姿である。自然に發した調子のある叫び聲だ。心の哀みや悅びや惱みを放散する徑路の道草だ。これがその民衆民族の共鳴支援を得てここに社會的存在の意義があり、價値があるのである。

民謠を聽いてその民を知る

上述せる如く民謠と民族との關係は極めて密接で、大きく言へば民謠を通じてその民風の良否や政治の得失さへ、窺知しうるのである。剛健なる民謠を見てその民衆の質實さを推し、淫靡なる歌謠を耳にしてその浮薄さを思ふの類である。殊に支那大衆は、音樂好きの民族であるから、その民謠は、かれらの生活に限りなき潤ひと慰安とを提供する一般民衆の音樂であり、一般大衆の文學であるとも見られる。

このやうな使命を持つ以上、自ら通俗的であり平民的であるのは當然である。しかしその爲めに一般の讀書人やインテリからは、較もすると低級扱ひ無價値扱ひを受けて居るが、この見方は一見當然の如くでその實然らざるものである。

人の上に立つ者、大衆の社會的指導を以て任とするものは、この大衆と共に存し大衆と共に生きてゐる民謠、大衆の性情陶冶に與つて力ある民謠が、いかに重要なる社會的役割を現實に果しつつあるかを正しく認識し、これを通じて、その民俗民風の善導、志操動向の誘掖に努力せねばならぬ。

今、歷代の儒學者が、經學の一つとして非常に珍重してゐる詩經も、その最も大切なる部分は、その當時諷詠されて居た民謠に過ぎない。これを漢唐以來の詩學專家が輩出して、いろ〳〵と勿體をつけ、歪みたる註疏を增加し、非常にむつかしいものにデッチ上げたのは民謠の本質に逆行したものと斷ずべきだ。

昔、支那に於いては、聖王が民風を知つて政治を行ふの資料とする爲めに官をして民謠を採集せしめたといふ文獻がある。卽ち、禮記の王制篇には、

「天子は五年に一たび巡守し…(中略)…太師に命じて詩を述べしめ以て民風を觀る」

とある。そも〳〵この太師てふ官は、周官篇にも明記して居る如く、周の三公の一つで、大臣格で音樂を司る官である。漢書の藝文志や食貨志には、なほ明白に、

「採詩の官があつて各地の詩を採集し、これを太師に獻じ、太師これを時の天子に奏聞した。」

といふ意味の事が記されて居る。卽ち、民風を觀る所以である。勿論、これらの文獻を絶對的に信ずるわけでも無いが、民間の歌謠が、宮中に於いて奏樂されて天子の御耳に達したであらうことは疑ふ餘地は無いと思ふ。

而して、支那各地に行はれて居る古來よりの民謠は、その本質的な立ち場から見れば、大抵、詩經の遺音といふべきであつて、粗野ではあるが何らの屈托の無い純眞な情緒が流露して居て、彼れ等の政治や家庭や、性生活や民俗や迷信等々を盛んに織り込んであることは、隣國文化に深い關心を持つ予としては捨て難き所、又微笑を禁じ得ない所である。

民謠の種類と內容

支那の民謠には、他の國々の民謠と大に異なつた持ち味がある。その持ち味は各民族に共通した民謠の普遍性と共に、しつくり抱き合つて居るので、決して、その持ち味のみ、孤立しては居ないのである。換言せばこの特種の持ち味が有るために、この普遍性を抹殺隱蔽することは無い。これらの角度から予が採集した二萬首の民謠を大觀すると、色々に分類される。私は、音樂的の立場から、民謠を「動作を伴ふもの」と、「伴はないもの」とに兩分したいのであるが、今は、暫らく、俗に從ひて內容上から、常識的に分類する。

然らば民謠の內容はそも何を示すか。大にせば彼れらの文化史の一角を示し、小にすれば彼らの生活の一片を指示するのであるが、私は、今、これを平凡に左の如く大別する。

1 政治的のもの
2 家庭的のもの
3 戀愛的のもの
4 年中行事を唱へるもの
5 教訓を示すもの

6　迷信を示すもの

等になる。その他、叙事的、叙景的のものもあるが今は略する。

1 民謠に現れた政治の是非

言論に對する壓迫が極度に徹底すると、自ら、國民の情意も亦極度に鬱結する。それが民衆の利害と相反する時は、猶更烈しい。もし秕政百出してなほ民の口を強く塞ぐと怨嗟は內攻して益益深刻となる。だん〳〵世の中が騷しくなり、人心が不安になる。その不安が恐怖、愚痴、怨嗟、憤怒、絶望、反抗と成長する。そこで、又、壓迫が愈重化すると、示唆に飛んだ諷刺となり、忍びえざる謠言となり、竟には大衆の口を藉りて政治に對する誹謗の民謠にまで發展する。これに類することは、わが國にも多少有つた。曾つて、幕政を誹謗して、

「世の中は、蚊ほどうるさきものは無し、
ぶんぶ(文武)と言つて夜も寢られず」

の落首となり、明治維新の強い示唆を寓しては、

「菊は咲く〳〵　葵は枯れる、
西で轡の音がする」

の都々逸となつた。古今東西、その揆を一にすると言ふべきである。

支那は古く且つ大國だ。その大部分を占むる漢民族の歷史は少くとも四千年の文化を持つが、易世革命の絶ゆること無く、虐政殘賊相亞いで起り民衆の慘苦はたとへなきに至る。これ歷朝のつぎ目〳〵にこの種の民謠が多く作られ、世の中を呪ひ、社會を怨み、暴君暗主を罵り、秕政の疊出を憤るの民謠を自づと發生せしめた所以である。かかる國家に政治的民謠の多く存するのは、當然の徑路でなるほどと首肯せられる。例へば、今もなほ北支那に口ずさまれて居る一般的な民謠に、秦の始皇帝を呪つた唄、

萬里長城

秦の始皇が築いた長城！
城壁が低う、通路が狹く、
韃靼の侵入、防ぎはしたが、

その後、可愛しや、一人の夫人、
千里の果てから、背の君尋ねて、
城壁の前で、しく〳〵泣いてる。
お天道さま！と一こゑ高く、
怨む涙に、あはれやあはれ、
長城の一角　崩れ落ちた（河北省）

これを見ても、この長城を完成さすのに民衆の膏血をどれ程しぼつたか。この延々八千支里の長城を築く磚瓦を燒くために、鬱蒼たる茂林の大陰山々脈の樹木は悉く切り取られ、それで、現在見る如き兀たる草山になつたとさへ內蒙古の土民が言ひ傳へてゐる位、深刻に怨みを植ゑつけたのだ。この民謠を思ひ乍ら、八達嶺あたりの苔むした城壁に立つてその昔を偲ぶと鬼哭啾々、旅人の心を抉るものが有らう。

つぎには、白蓮敎徒の一派が前淸の嘉慶年間、呪文で民衆を惑はし、果ては叛逆を企て、遂に河南省の滑縣にまで押し寄せ、無辜の縣民を殺戮した事がある。今もなほ、これを悲しんで歌へ

るものに——。

白蓮敎！
盲滅法出たら目だ！
滑縣城で大砲打つぞ！
白蓮敎！
盲滅法出たら目だ！
親があるのに白鉢巻で。

これは、支那古來の風俗では、親の喪に在る婦人は白い布で頭髪を包んで、哀悼の喪章にする。當時白蓮敎徒は、白布の鉢巻を以て敎徒間の目じるしにした。それを「親が死なぬのにどうしたか」「その敎義も亦デタラメだ」と誘つた唄である。今もやくざ者を「白蓮者」といふ。近代では、同治帝、袁世凱、蔣介石、張宗昌、孫傳芳等々が無數、民謠に弄ばれてゐる。かう言ふことは、わが國では見られない事實だ。

袁世凱は中華民國第一期の大總統だ。舊來の傳統を打破して民心を新にせんものと、先づ滅滿

漢興の旗印の下に、滿洲風俗の辮髪を禁じて斬髪にした。次ぎに紙幣を發行してその流通を強制した。これが保守的支那人に嫌はれて、民謠で冷笑された。卽ち、

袁世凱

袁世凱はいたづら者だ。
市中どこもお坊さん！
お廟もないのにどうしてか。
銀貨を廢して札にした。

實質的の銀貨を喜ぶ支那人の氣風がこれにもほの見える。

つぎに今より二十年程以前の唄——

宣統帝

宣統王位に復つたら、
禿さん、首を刎ねられる！
宣統うまく追ひ出せば、

禿さん首尾は上上だ。

といふ意味のものであるが、この禿さんはそも誰れか。袁か、馮か、はた、張か——。

而して、中華民國が南京に國民政府を樹立した當時の主席の人氣はとても素晴らしいもので、その當時の民謠には彼の偉大さを禮讃したのが數首見受けられる。昭和十二年突發の日支事變から、今日迄約十年間、どんな民謠が、湖南や江西の田舍や山間に口ずさまれて居るだらうか——聽きたいものだ——。

支那人、(殊に北方のそれ)は、心では惡いと思つて居ても中々言葉には出さない。相手の非難を面前にやる事は殆んど無い。どんなに心に反對して居て分り切つた事でも、相手に逆らはない。これが率直な人には、面從腹非と言つて忌やがられるが、併し、それを「相手に氣揃い思ひをさせない」爲めの禮儀と心得てゐる支那人も相當多い。勿論、これが自己保身の道ともなるが。かの奸臣趙高が秦の二世皇帝に馬を獻上し乍ら、鹿と言つて欺いた時、左右の臣が、

これは鹿でございます

とお對へした奴の多く居たのも、かかる心理であることを推すと、彼の國民性がよりよく明瞭に

なる。

又、天下平明の治も、民謠となつて自づと謳はれた例も有る。古い有名な唄、堯帝の時に、

われ〳〵人民の生活が立つのは、
みんな、あなたの至極のおかげだ。
別にあなたの教へを守る氣はないが、
知らず〳〵天子の規則に從ふ。

といふのは、堯帝無爲の至治を謳歌した古民謠である。これは文獻に遺つたものだ。その他教育の狀態、民俗の厚薄、生活の緩急等々――、民謠の上に映ることが多い。

宜興に遺存してゐる前清の老將を罵倒した民謠には、「前清の老將は、砲聲を聞くと、驚いて刀や銃を取り落すが、若い娘なら勇しくつき殺す」といつた風のもの。共產軍の兇暴を唄つたものが南通にあるが、これは、かれらが、父母妻子を無視して慘殺したことを激怒したものである。

この他、政權の移動や治亂の豫斷を諷したものもかなり多いが、これは、多少謎語的の表現を加へてゐるので、中々その當時は採集も理解も出來難いが、文獻に見ゆるものは、それが過去と

なつて證據だてられたものゆゑ、二三附說する。東晉の時の民謠に、

千里の草、
何ぞ青々たる。
十日の卜ひ
生くるを得ず。

が流行したといふ。これは、「千里の草」は「董」の文字となり、「十日の卜」は「卓」の字となり、熟して董卓といふ奸雄の氏名となる。東晉の代、靈帝の死後、董卓が不軌を藏し、新王の獻帝を弑して己れこれに代らんとする毒心を看破せる大衆が、諷刺的に唄ひ出したものと言はれてゐる。果せるかな、青々と茂つた草も、遂に「生くるを得ず」で呂布の殺す所となつた事は、史實の證明する所である。

これに類した豫言的の民謠をもう一つ。

馬を山べで放し飼ひ、
大馬は死んじまつて、

小馬が餓ゑてゐる。
高いお山は崩れおち、
石がひとりでにこはれた。

これは、晉の明帝の太寧年間のごたぐ〜で、明帝の死後、子の成帝年なほ幼し。ここに、佞臣の蘇峻、その弟の蘇石と合作し、晉室を奪はんとし、先づ成帝を唆かして都を江寧の近くに遷させたが、邊地で食膳不十分である。晉室の姓は「司馬」。これ大馬は父帝、小馬は幼帝を指す。「峻」は高山の形。ここに高い山と石とを以て蘇兄弟を指してゐる。

これらの事柄を、あらはに大聲疾呼せば、已れの身柄と首ッ玉は二分されるから、謠を藉つて風したのであらう。

その他、唐の僖宗の光啓年間のもの。陳岩に代つて福建の觀察使になり得た王潮が、その地位を壟斷してその弟の審知に讓らんとの魂膽を諷して唄つたもの等、かかる例は枚擧に遑無く、いかに暗黑の政治狀態が、民謠にまで反映してゐるかを窺知するに足るのである。

2 民謠に現れた家庭生活

つぎに民謠を資料にして、支那の家庭生活を覗いたらどう見えるか。漢民族は、個人を基調とした英米の家庭とは固より異なり。家族的な日本民族に比べても、より以上に大家族主義で、最近くづれかかつたとは言へ、なほ宗法が、隱然たる拘束力を持つて居る。だから、國民としての結束力よりは、寧ろ、家族としての結合力が遙かに強い。これが旨く行くと、かの唐の張公藝が百數十人の大家族を一つの怨み不平も無く敦睦せしめた美しい玉の家庭を現出し得るのであるが、あまりに大家族主義で、血族の關係があまりに複雜の爲めに、一面、又、ひどい無理や壓迫、又、自分の欲しない犧牲を強要されたり、結婚當事者の無自覺、又は、幼年幼女の許婚、さては、賣買結婚や、子女を賣却することなど、或は親權の絶對から起る偏愛の怨嗟や、舅姑と嫁女、後妻と繼子、本妻と妾と、兄弟の異母關係等々、隨分煩雜な紛糾が民謠に唄ひ込まれてゐる。これは日本民族の民謠にあまり多く見ない所だ。ことに不自然な結婚は、罪惡と悲劇の溫床である。年齡の不釣合の夫婦は、しば〜見る所であるが、その極端の例は、

嫁さん十八、壻さん三つ、
尿にうんこ、抱に就寢。
夜中に眼をあけ、おつぱい〳〵、
バタ〳〵 お口鳴らしてる。
妾はあなたの妻ですよ！
あなたの母さんぢや無いわいな（南京）

兩親相互間の意志のみにより、早期の許婚又は賣買結婚も、今尙ほ、往々目擊する所で、此の怨恨が高じると、時には、

嫁さん丁度十七よ！
四年經つたら二十一よ。
壻さんやつと十になる。
嫁さん、壻より十一上だ。
ある日井戸に往く、水酌みに、

一方が高けれや一方が低い。
舅が可愛がつてくれないと、
お前（壻）を井戸に突き落そ（北京）

はねつるべの如き夫婦年齢の差は、ややもすると邪淫の捕虜になり易い。

つぎに陝西省の民謠にこんなのが有る。

青い石ころ！
シヤン、チン、トン、
父さん、勝手に妾賣る。
賣つたお金で借金返し、
妾の仕度にやしてくれぬ。

これは賣買結婚の實情を暴露したもので、子女は父權に從屬する一種の財貨と言つた封建的遺風である。又、

大鳳陽、小鳳陽！

鳳陽はもと良い城下
あの朱洪武の出てからは、
十年の旱、九年の不作。
富家は、田を賣り、
貧家は、子を賣る。
俺には賣るにも子供無い。
太鼓を負つて、銅鑼持つて、
國から國へ、旅歩き！

賣るべき子も無いので、さすらひの旅藝人として故郷を出立するとの意だ。斯ういふ場合に賣られ行く子供も可愛さうである。都會地の妓女には、かうして賣られたものもカナリ有つて、父母の名も知らぬ妓すら有るとの事だ。惻隱にたへない。

更に又、一夫多妻的家庭に於いて、實母に死別された幼兒程慘めな者は無い。つぎの唄はそのあどけない歌詞が熱涙を濺がしめる。

白い毛のひよ子！
焚火の柴に上る。
親の無い子は、
どうして暮らそ！
猫に從いて寢りや、
猫が引つ搔く。
犬に添うて寢りや
犬が　咬みつく。
私を抱してくれるなら、
どんな繼母でも良いわ！

併し、後妻は時に繼子苛めすることもある。これが家族主義の缺陷かも知れぬ。

キキヤン〳〵　時鳥啼く、
お金が有つても後妻買ふな。

前の母さん雞を煎れば、
股の上肉　私にくれた、
今度の母さん雞を煎れば、
腹の臟物、私にくれる。
臟物は食はれぬ、柳に捨てた！
母さん思ひ出し、泣きじやくり！（湖南）

となり、又、炎天を繼母の虐待の烈しさに照應せしめて、

六月の土用と、
繼母の拳固、
日は照つて烙けつく。
拳固で打つ、棒でつく。

淺ましいのは、眞の母性愛に目覺めぬ婦人の小乘的差別愛である。繼子苛めの唄が多いのは家庭生活の無理からであらう。

併し、子寶と言ふ思想は、漢民族にも甚だ旺盛であつて、子を賣る爲めに生むものは有り得ない。有つたら、それは貧のどんぞこに浮かんだ泡沫的存在だ。支那人の思想として、結婚は、先づ子を產まんが爲めで、その生活の目標は、

一、良い子を澤山生むこと、
一、お金を澤山儲けること

で、これがこの民族の最大なる幸福と思はれる。子供が無いと子孫が絕滅する。從つて祖先の祭祀が出來ない。これが不孝の大なるものだ。早く良妻を迎へて子孫を得よう。もし嫡妻に子でも出來無いと困るから、第二第三の夫人を迎へて子孫の繁榮を計らう。——この思想は一般的のもので、これを反映した民謠も相當に多い。

新夫婦の部屋は、
蠟燭がきら〳〵。
お金は地に滿ち、
子供は、座敷に一ぱい……

と言つた風だ。貧乏人の子澤山と笑つてはならぬ。又、かの

かささぎが　喜んで啼く、
お父さまが　お金儲け、
お母さまが　弟生んで、
兄さんが　姉さん貰つた。（興化）

はその幸福が典型的に満たされた唄だ。併し、この重大なる後繼者を得べき爲めに、多妻となり、蓄妾となつて、享樂的傾向の著しいのは、惜しむべきことだ。

3 民謡に現れた戀愛生活

日本の民謡には戀愛のそれが多分に有る。この點支那のそれも相似てゐる。而して兩者共に相當ひどいものもあるらしい。

しかし、この性愛は、天性的のもので、人生缺くべからざる最も高潔で神聖なるべきものであつて、羞恥心で修飾された戀愛過程は、あらゆる文學的分野に、種々の傑作を送つて居る。

民謡が民衆の口から口へ、耳から耳で傳へられ——文字で記錄されないものが、かく長い年月を減びもせず將來に持ちつづけて居るのは、この止み難い神祕な戀愛の琴線に觸るるものがあるからである。

自然的な戀愛を正しく指導することは、君子や識者の負ふ道德的義務であらう。これが淫に流れ狂に走る事のみを恐れて、これを無視否定することは思想家警世家の與みせぬ所である。しかし、これらの中には隨分原始的な動物的な如何はしく聽くにたへぬものもあるが、又、かの孔夫子の喝破された「思ひ、邪無き」純眞な優雅な天眞爛漫なものも頗る多い。油濃い所はなるだけ割愛して、あつさりした涼しい戀愛の二三篇を引例して紹介する。江蘇の楊州地方で唄はれて居る天秤棒といふ小唄！

小さな天秤棒、
なよ〳〵しわむ。
お米擔つて楊州に下る。
お米が綺麗と楊州妓が賞めた。

楊州妓は綺麗と私も賞めた。

言ふ迄も無く、楊州は、水と楊の都で、且つ、米と美人の産地である。わが鎌倉時代の入宋入明諸僧は大抵ここを通過して洛陽長安に往つたのである。これは、旅商人と歌妓との溫い序幕で有らう。つぎに戀愛が成立すると、雲南の南瓜飯となる。父母の目を忍んで款を示す所が面白い。

朝疾う起きて、あの娘を訪ねる。
あの娘の家では南瓜飯。
樣に進げたや、この南瓜飯！
心にや思へどお座敷に、
父さま母さま　居らつしやる。
郎は歸る。あの娘は留める。
蕎麥粉の餅に　猪肉を包む。
歸る途中に　包みを開けりや、

あの娘の實意が　中にある。

この戀愛風景に邪魔が來ると、田舍では、掠奪結婚となり、賣買結婚となり、時に駈け落ちとなる。卽ち、

張物持つて、一張づつ張つて、
他家に一人の　娘さん！
お芳紀は幾つ、
十八、十九。
きのふ、壻さんが、さらつて行つた。

となる。これ正式の禮を行はない野合結婚、禮に言ふ、所謂「奔」の一つである。奔は社會的にも賤しめられるから、第二夫人でも第三、第四號でも、(たとひ、それが、事實賣買結婚であつても)、媒介者を立てて親迎し、花轎に乘つて堂々と乘込む。所謂「輿入れ」するのを自慢にし、本體とする。これ亦、一般の面子である。

さて、女性を主格に唄つたものの中から、稍上品で風味のあるものを摑み出すと、北京地方で

「都はづれ」といふ唄、

都はづれの　小さな御門、
御門のそばに、小娘一人、
風情有りげに、立つて居る。
白い下着に　藍色の褲子、
耳には耳輪　頭は大髷、
頬紅つけて、白粉塗つて、
妾の壻さん、誰ーれ！

妙齢の女性が好匹を求める憧れの夢を素樸に告白したものか。斯くて愛情が完成すると、「七夕」を借つて、次の如く唄つてゐる。

太鼓は太鼓にもたれる。
銅鑼は銅鑼にもたれる。
今日來た嫁さん、舅姑にもたれる。

お月さま出て來て、
沙羅樹にもたれる。
七夕姫と彦星は、
天の河原でしつかともたれる。

この歌謠は、感情の誘導を前四句に工作させて、最後の情景を生かせたもの、線の柔かな上品の處が取り柄であらう。これが合理化して、正式の手續を取ると、即ち、

花嫁、花かご、八人で舁ぐ。
舁いで壻さんの　邸にねりゆく。
哥さん　妾をお轎に乘せる。
嫂さん妾を、涙で見送る。
銅鑼を叩く、花火をあげる。
チン〳〵ドン、ほんとに賑やか。

といふ花嫁行列となるのである。

而して、戀愛は必ずしも美人の特權ではない。生を享けたものの普遍性である。然るに世間往往戀愛と美人とを緊密に連想するは、どういふわけであるか。これ生氣潑剌たる青春時代を最と するからであらう。然らば美人とは如何。男子は暫らく言はず。支那に於いては、女子の顏立ちは、額が四角で、眉は蛾の如く、細くやさしく、齒は、純白なのを尊ぶ。わが富士額とは違ふ、——これこの民族に於ける美人の標準である。「看見地」(彼の女を見て)といふ民謠に、「四方大臉」といふ言葉がある。これは四角い顏といふ意味で、美人の形容詞である。

すだれ越しにて、かの女を見れば、

四角い顏に　黑い髮、

紅緒の紐で、辮髮結うて　云々

とある。これが、四角い顏卽ち角い額で、西太后その他貴婦人の畫像を見ても皆この方額である。この好尙は極めて古く、春秋戰國時代から然るので、かの詩經の碩人章に、莊姜の美貌を盛り澤山に形容した一節にも、

手は柔荑(つばな)の如く、膚は凝脂の如く、

領は蝤蠐の如く(白く)齒は瓠犀の如く、

螓首蛾眉、巧笑倩たり、美目盼たり。

とある「螓首」は、「蟬の頭の四角いこと」で、上述の如く美人の一要素である。しかし、この傳統も近代餘程うすらいだやうであるが、田舍では未だその纏足と共に賞味されて居る。

4 民謠に現れた年中行事

春去り夏來り、秋を送りて冬を迎ふ。この四時を節に分つていろ〳〵人生と結びつけた年中行事がある。この年中行事を調査するには、歲時記のやうなものや、その地方の府志州志などを繙いても良いが——かれら民衆の最も頸を伸ばして待望してゐる正月やら三月三日や端午の節句、或は淸明の節、七夕等がいかに民謠に融け込んで居るかも趣味がある。單調にして素樸な田園生活がこれらの年中行事に因つて、いかに潤ひと慰安とを提供されてゐるか。只一枚の門神像を門扉に貼つただけで、新しく來る春を待つ民間の情景は、都塵では味はへないものが有らう。五月の粽や師走八日の臘八粥の如き、年老いし爺も婆も、その幼かりし子供時代を思ひ起して、粽の

かをりをしみ〳〵となつかしく思ふであらう。吾々も少年時代を回顧して、「福は内鬼は外」の節分の豆撒きや「猪の子餅」の味が今なほなつかしい。更にこれが民謡となつて民間に流布詠唱されたら、一入思ひ出をそそるであらう。年中行事が餘りに多く民謡化してゐるのを通して、その民風民俗、又は、その生活形態の一角をつかむ事も出來る。

例をあげる。前述の門神だ。これは、門戸の神で、漢民族の一般的習俗として貴賤上下おしなべて廣く行はれ、その猛々しい風貌は悪魔の侵入を防ぐと信ぜられ、毎年十二月の二十日すぎから、そろ〳〵迎歳の心構へで門戸に貼り代へられるものだ。神像は一見して端午の鍾馗によく似て居るが、その傳統は全く別物である。その歌詞は、

戸口の神さま、〳〵、
兩つの眼々を見張つて、
一年一度の貼り換へで、
すつかり悪者になりきつた。（雲南）

それから待ちこがれたお正月になるのだ。

一ケ年の年中行事が大略乍らまとまつてゐる民謡は、「孟姜女十二月」であらう。「孟姜女」は支那民間に最も廣く最も深く浸みこんでゐる民間傳説の女性の名で、日本で言ふなら「小町」といふ所であらう。これが實在の人物なりや否やに就いても大に議論の有る所であるが、津々浦々この傳説に親しみを持つてゐる支那人の情緒を忘れてはならぬ。だから、この歌は一大歌系を形成し、長いもの短いもの、事柄の多少異つたもの、曲調の相違等々、種々様々な表現をされてゐて、これだけで一大群落を見る位だ。その中の一つが年中行事に結びついて、この孟姜女十二月となつたやうである。そも〳〵孟姜女の故事は春秋時代に遡る。左傳襄公の二十三年に、

「齊侯晉ヨリ還リテ入ラズ。遂ニ莒ヲ襲ヒ且于ニ門セシメ股ヲ傷イテ退ク。明日將ニ復戰ハントス。壽舒ニ期ス。杞殖、華還甲ヲ載セテ夜且于ノ隧ニ入リ莒郊ニ宿ス。明日先ヅ莒子ニ蒲侯氏ニ遇フ。（中略）杞梁ヲ得タリ（中略）齊侯歸リ杞梁ノ妻ニ郊ニ遇ヒ之レヲ弔セシム。辭シテ曰ク、殖之有罪何ゾ命ヲ辱メン。」云々。

とあるに濫觴し、いろ〳〵變形流布し、現在の民間傳説として持ちこしたものだ。今では、秦の始皇帝が一萬里の長城を塞上に築いて北狄を拒いだ。孟姜の夫君杞殖（後の范喜良）も徴されて徭役に

趣いたが、遂に戰死して、白骨となつた。それとも知らぬ孟姜は、朔北の風霜に夫君の身の上を案じ、綿入れの着物を携へて千里、塞上に來て見ると、あはれ、夫君は既にあの世の人となり、累々たる髑髏は、どれが夫君の記念なるやさへ判然せぬ。聞く、因緣の骨に、己が生血を注げば凝固すと。孟姜、この白骨を順々に指の血もて尋ね歩くに、中に一骨あり。血忽ちに凝結した。これぞわが夢寐にも忘れ得ざりし夫君の果てか――と、哭血、涙は滂沱として流れ、遂に長城の一角はこれが爲めに崩るるに至つた。――といふのである。

この話は、時代と場所とに因つて、いろいろ尾や鰭がついて、變化し、名も、「杞」が「范」に、更に「萬」となり、ある地方では「萬喜良」となつてゐるのも有る。又、ある論者は、前朝秦の始皇の虐政を暴露するために、漢の高祖が、政策的に宣傳流布した說話とする向きもあるが、俄かに贊成することは出來ぬが、この孟姜の名稱は、六朝時代既に民間無名の大衆に因つていつのまにか傳誦されたものではないかと思ふ。

「孟姜歌十二月」は更に後世のもので、年中行事に組み合せて、右情話の本筋から大分遠ざかり、正月には、お座敷に綺麗な燈籠を始めいろ〳〵の飾りつけをすることを唱ひ、二月では、仲春の

と故、百花が咲き揃つて、燕が來る。泥を口に含んで、巢を作ることを歌ひ、三月は、これ清明節のある月で、家族皆墓參り、子供は白い紙を挿む習俗あるも、孟姜は若き寡婦で子供が無くて寂しい。四月は、田植る。姉さん伯母さん苗を採る、薄い裳裾をからげて汚さぬやうに、五月はこれ端五の節句。龍船を競漕、太鼓叩いて河上はにぎやか。船楫皆で二十四挺、その中にわが夫范喜郎の居ないのがさみしい。六月は眞夏、日はきら〳〵、道は千里の大通り、池には鯉が仰向いて死んでる。その中にわが范喜郎の姿は見えぬ。七月は鬼の住む地獄の門が開いて、そこから來た手紙を讀むと、着物を送れ、靴を足袋を――と言つた意味を歌ひ、八月は、秋風の涼しくなるにつれて、どの家も冬衣の準備する。冬着が出來たらすぐ主人に着せるが、孟姜には夫が無いから、行李にたたんだまま、納つて置く。九月はこれ重陽の節句。供へた老酒の桂花の香ひ、こさへた御馳走を夫君に進める。だが、孟姜の夫はあの世に居て喰べてはくれない。十月は、お上に年貢を上納する月。お米を官倉にさし上げる。人家は主人が上納するが、孟姜は獨り者、自分で上納に行く。十一月は冬で寒くて冷い。他家には賑やかに赤坊の啼きごゑが聞えるが、孟姜には兒が無い。雞の啼聲を聞くのみだ。十二月は雪がひら〳〵飛んでくる。蒲團幾枚も重ねて暖く

しても夫婦の共寢にや及ばない――と言つた風のもので。外に、こんな調子の換へ歌らしいものが二三十種もあらうか。又、同じやうな十二月と題して一月に梅、二月に杏、三月に桃、四月に薔薇、五月に石榴、六月に蓮の花といふ風に、主として其の時期の花を配して孟姜の孤獨を唱つたものもある。

而して、これらの民謠を通じて、迎年の準備のもやうや、新年の舊慣、或は清明節の意義、三月三日の傳說等々、中々面白いものがある。

例へば、邦俗若水を酌む元旦の儀も、何か誦する語句が殘れば、その事はすたれても餘韻は深い。結婚式の時、新婦の尻を叩く邦俗も、その時の歌謠があれば、永久に傳はり易い。たとひかかる草昧な蠻俗が早晩地上を拂ふに至るとも――、この見方から言へば、支那の結婚の時期とか、又、門出とか、床入りとかに、色んな儀禮的行事があると共に、且つそれを唱ひつつ後の世に傳はるのを見たら、どんなに人の世の情愛生活に深い思ひ出を刻むことだらう。又、文化が日に日に進んで、これら在來の儀禮的行事が生活樣式の變化に因つて廢れたとしても、その歌謠だけでも殘存して居たら、どんなに文化史上になつかしみを加へるであらう。又、年中行事の特殊

のものとしては二月の二日である。日本では、正月元旦、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日だけであるが、所によれば、支那には、二月の二日には、新婚の嫁女が、里に歸省する習俗がある。お餅をついて、嫁女を船に乘せて――これは南方の「漣水」や「高郵」地方の澤國に存するので、唄に、

二月の二日は、
龍が頭あげて、
家々の門前に活猿望む。

龍は龍船で舟の形容、猿は赤く裝つた新嫁をさすのである。又、八月八日も釘鞋を穿いて寶塔に行く習俗あり。今此れらの風が滅びても、なほこの遺風を民謠の上に發見し得るは、研究上どんなに嬉しいことであらうか。これ亦文獻以外の生きた文獻である。

5 民謠に現れた教訓

民謠の中には民衆の好尙の加はつた平易な教訓歌が散見する。その土地と民族とを基調とした

道德觀を見るに十分だ。湖南省の一角に鍬を持つ農民――「稼ぐに追ひつく貧乏無し」の意を詠みこんだもので、田園の自力更生を喚起した面白い唄がある。

遲起き、早寢は　杖ついて乞食。
早起き、遲寢は、お米が腐るほど、
お日樣、屋根に　上る迄　寢ると、
馬を賣らねば、牛を賣る。

江蘇省の「木喰ひ蟲」といふのは少し理窟が勝つてゐるが矢張り教訓歌謠だ。

木喰ひ蟲　〳〵！
木の心喰べて　孔開けた。
木の中、宛然　がらん洞。
もし木が枯れて　倒れたら、
そしたら　お前何喰べる？

喰べるものが有るまいとの寓意だ。興だ。獅子身中の蟲と同斷。親爺の脛を咬じる息子達の感想奈何。

つぎに「星の宿」を歌つた四川省の民謠を紹介する。人間の弱點として、富める者は驕り、貧しい者は卑屈になり勝ちだ。その底流に動いて居る漢民族特有の宿命觀も看取し得る。これは相當に古く、故事を引いたのはめづらしい。

天上の星の宿にも、
有る所と無い所と有る。
貧乏人の破衣を笑つてくれるな。
十本の指でさへ、
長いと短いがあり、
森の中の木にすら、
高い低いがあるものだ。
蘇さんの　嫂！
朱さんの　細君！

富貴が好きで、
貧乏が、嫌ひで、
後悔しても、間に合はぬ。

中々面白い。蘇秦が落魄して家に歸ると嫂が食膳を供しなかつた故事と、朱買臣が未だ名を成さなかつた放浪時代、その妻から離緣話を持ち込まれた事で、敍述し去つた所は「今に見ろ」の餘憤を藏して居る。

つぎに廣東の「にはとり」といふ唄、

雞

雄雞が　羽根搏つて
ときを告げる。
雌雞と雛兒が、
聽き耳立てる。
雌雞が後振り向いて

雛兒に言ふ——
「お前の父さま、
隨分お歌がお上手ねえ！」

聽きやうに依つては、氣障な惚氣にも思はれるが、相手が子供だ。人の母たり妻たる者は、己が子をして其の父を深く尊敬するやうに仕向ける心構へが欲しい。廣東と言へば、民國革命の發祥地で、表面的に見ると、歐米崇拜の氾濫地、やれ三民主義、廢娼運動、男女同權等と八釜しい中心地だ。それに今尙ほこんな古くさい民謠に生命があるのを見ると、民族の底流は案外保守的だ。これによつて、一般民衆の風尙をも察知したい。

もう一つ、この「雞」以上に溯つて、古典的な風味の遺存する民謠を、河南省から採錄する。

野良仕事

蟲が飛ぶ〳〵、はた〳〵と。
舅が田を鋤きや、
姑が鍬打ち、

嫁女が土こなす。
道通る人、笑つてくれるな。
妾や、百姓の　嫁ぢやもの！

と言ふのがある。これは特に私の注意を惹いた。河南省は、漢民族に取つて古代文化の中心地だ。そこに今尚ほ「古代の禮」が殘存して、男女の偶坐偶耕を避ける氣持を見せる。人前だけでも告朔の餼羊以上か。夫君は出稼ぎ、妾は貧農の嫁御寮、止むなく舅姑の後に從いて農耕をすると言ふのである。男女に別あるの思想は、近親なほ然るを示すもの、斯くしなければ過誤に陷るを防ぎ得ない氣持も十分に看取されはせぬか。かかる傳統は、田舍にはなほ多くの事例を持つであらう。

6 民謠に現れた迷信其他

そのつぎに、民族的迷信が民謠の中に音聲を以て記錄せることを敍べて見たい。古代の文化は、蒼天にかかる七彩の虹の橋を以て、或は紆縵とた靡く慶雲を以て、一つの大きな神祕と感激と恐怖とを感じ、人事と共に合せ考へて、あるひは、天意を占ひ、或は、一身の吉凶をトひ、その他様々の感情と迷信とを結びつけた。それが特色ある歌詞によつて風誦され、傳誦されてゐるのを見落してはならぬ。虹の東にかかつてゐるのを、陰氣の天象として淫婦の戒めとし、人敢てこれを指さないといふのは、古い所では、詩經の鄘風に出てゐるが、天象を見て、（月、星、雲、虹等）を見て喜悲禍福を示したのも相當にあるし、又、鳥獸に因つても、吉凶をトしたものもある。喜鵲（かささぎ）が啼いたら待人來たるとか、火がはねたらどうとかいふ日常生活に結びつけたものも亦多い。かの張文成のものした「遊仙窟」の中にある詩句にこの喜鵲のことを咏じてあるが、それと同じやうな民謠が、南方支那には幾種も現存する。いろ〳〵比較して見ると、支那では、烏や鵲が、いつも善人、孝行者、緣喜の良い鳥としてもてはやされる。ことに鵲は喜鵲といふ風に熟語し、鵲が啼くと、「好き人來たる」といふ迷信がある。序だが又、烏に反哺の孝ありで、日本の烏が、物忘れの鳥と罵られてゐるのと一段の差である。江蘇地方の民謠中に、

チヤア〳〵〳〵、鵲が啼いた。
ゆふべ　行燈の火がはねた！

キツト、お家に人が來る。
今日來なければ、明日來る！

と、遊仙窟の『朝聞烏鵲語。眞成好客來』と同曲だ。そんなのは、各地方幾種となく現に殘存してゐる。一つは、一千餘年前の記錄、一つは現在、里の牧童達の口に傳誦されてゐるもの。この民族が懷古的保守的である一面があらはれてゐる。

その他、「麻子」の唄も、かなり多い。「麻子」とは、天然痘に罹つた人の顏に殘つたあばたを歌つたもので、

「麻子要死」
「麻子回家」
「麻子變烏龜」
「麻子上弔」
「大麻子小麻子」等々

數十首のそれがある。これを見ても、この老大國が、いかに、近代科學に立ち遲れて、豫防の

種痘をしないために、その民衆の如何に天然痘罹病者の多いかを洞察するに難くない。足を、一たび、支那の邊地に踏み入れんか。その然るを證するであらう。

又、民謠中には、「禿子」(はげ頭の人)の民謠がいかに多いか。又、阿片の唄もどんなに多いか。坊さんののらくらを嘲笑した歌も又、たえず、俚巷の口に歌はれてゐるやうである。これを見渡して考察すると、又、皮膚病患者、阿片中毒者の多いこと、無智無力の僧侶の無自覺な生活も推知し得る。近來鴉片禁止を督勵し山西省では閻錫山も大がかりで、その宣傳劇として「毒鍋鑑」すら演出させたが、まだ〳〵といふ所である。最後に童謠風の民謠を一つ擧げる。

お豆をたべると、
肥つて　まる〳〵、
お豆を喰べなきや、
瘠せこけ、ほつそり。

日本では、健康の事をマメといふ。二者の關係の有る無しに拘らず面白い對照だ。一面又、通俗文學として見ても捨てたものでは無い。今は、紙數にも制限があるので、考證めいた理論的な

ことは一切省略するが、童謡といふ名詞も上古から有つて、これ亦民謡とほぼ同意義に用ひられた。列子の仲尼篇には「堯帝が出でて遊ぶと、街上で童謡を聞いた」と載せてある。却つて民謡といふ語は近來の語で、その昔は「風」と言はれてゐた。

未だ述べたいことは澤山あるが、ほんの一片を紹介して擱筆する。日本文學との比較や、詩經との比較、其他、「狼獾」、「蛋」等の民謡の批評等も十分に論及するの餘白無かつたことを遺憾とする。

言ふ迄もなく民謡はその民族に承認されたもの——民衆の生活に溶け合つたもので無くてはならぬ。單なる作者の聲ではない。換言せばその民族民衆の感激と興奮とのカクテルにピッタリ共鳴して居れば良いので、作者の誰れであるかは問題ではない。

例へば、日本の都々逸の

わしの殿御は　三日月さまよ！

宵にチラリと　見たばかり。

でも、支那の「孟姜女」でも然りだ。只民衆の情感と風尚とに合致するため、一般民衆の支持が

「歌ふ」と言ふ事實に因つてこの「歌」に現實の生命を吹きこみ、世々に歌ひ續けられたものである。

思ふに民謡の發生はいかなるコースを取つたで有らうかを考察するに、誰れかが、自分の感情をこめて歌ひ出した文句が、その民衆の心胸に觸れ、民間に歌はれ行くうちに、いつとは無しに自然に修正や洗錬が加はつて、それが地域的にも或曲調を作りあげ、遂にそれが固定して、各種の民謡、俗曲が生成されたものと思はれる。だからこれら民謡は時に一人一時代の作もあるだらうが、大抵はその曲もその詞も多くの人の手に因つて相當の期間を費して仕上げられ流布したもので、この仕上げも流布も民族的風尚に自然と抱擁され乍ら、行くところに行き、止まる所に止まつたといふべきで、人爲的に故意に傳へんとして傳へたものではない。即ち、民衆の感情を基調として、自然に作られ自然にほとばしり、自然に生長した純眞素朴な曲から言へば、民族的一般的音樂であり、詞から言へば平易な國民文學である。

されば現在山村水郭、或は長隄廣野で、里の賤の女が菱の實を採り乍ら、倮童が水牛を追ひ乍ら歌ひつつある民謡は、かれらの内的生活と不可分の精神的要素を形成してゐるので、この點か

ら、

民謠は民衆と共に生きてゐる

と斷言し得る。もし彼れ等の感情的生活と相容れざるものか、或ひは沒交渉の者があればそれはいつのまにか自然と彼等から離脱して終ふ——卽ち死んでしまふ。卽ち、歌はれなくなる。歌はれなければ、それは生命の無い歌だ。否、歌はれなくなつたらそれこそ歌ではない。

第二篇 對譯 支那民謠選